

学芸員研究ノート 照葉樹林を舞うミナミヤンマ 苺部治紀 (当館学芸員)

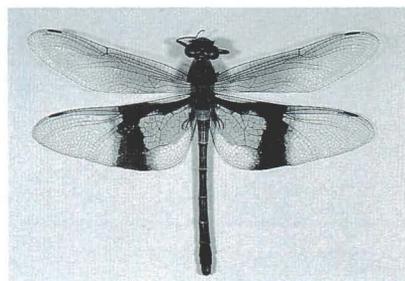
もし、屋久島や沖縄などの九州や四国の南部より南の島々を夏に訪れる機会があったなら、黒々とした照葉樹林を流れる溪流にそって歩いてみましょう。川近くの空き地などの開けた空間で、群れをつくってふんわりとグライダーのように飛んでいる、オニヤンマに似た大型のトンボが目につくはずで、これが「ミナミヤンマ」というトンボで、この仲間は南日本を北限として東南アジア各地に分布しています。幼虫は溪流の砂泥に体をうずめて生活しており、成虫になるまで数年かかると考えられています。その雄大な飛翔を見ていると、移動能力も高そうで海だって渡れそうに思えますが、実際には、生息地の溪流を離れることはあまりないようで、産地間に安定した色彩・形態の変異がみられます。海を隔てた島々の間ではもちろんですが、例えば高知県のように陸続きの場所でさえも東西の産地間の変異は大きく、この仲間の能動的な移動の少なさを物語っています。

さて、僕がこのミナミヤンマの仲間に興味を持ったのは、かれこれ10年近く前の大学3年生のころでした。そのころひんぱんに昆虫の調査に訪れていた、南西諸島の島々の間で見られる翅・体の斑紋や、オスの腹部先端にある交尾のさいの把握に使われる尾部付属器の形態の著しい変異に目をうばわれたのがきっかけだったと記憶しています。もっとも研究対象をミナミヤンマにすれば、南西諸島に行くすばらしい口実になるという下心もあったのは事実ですが…(なにしろ各島を訪れて、標本を収集しなくては話にならないのですから！実際、学生時代の数年間に、南西諸島の中でもミナミヤンマを産する島々には、ほとんどすべて調査に訪れました)。

入り口は日本の国内のものでしたが、すぐに東南アジアに目を向けるようになりました。ちょうどそのころからマレーシアやインドネシアなどの国々へ調査にでかけるようになりこれまで見たことのないへんてこなミナミヤンマの仲間が採れはじめたのです。ところで、トンボのような目立つ昆虫では信じられないことかもしれませんが、東

南アジアのトンボに関する研究は大変遅れています。これまで国内外の数人の研究者がたずさわっただけですから、現在でもいくらでも新種がでてくるとい、いわば未開拓の地なのです。そのなかで、ミナミヤンマの仲間は大型で美しく人気も高かったのでしょうか、オランダ・イギリスなど東南アジアに植民地をもっていた国々の研究者によって早くから記載されており、僕が研究を始めるころまでにすでに30種近くが知られていました。こんなに目立つ仲間なのだから、さすがにいまさら新種は出ないだろうと思っていましたが、ところがいざ調べ始めてみると、マレー半島で僕や友人が採集してきたミナミヤンマはこれらのどれにも当てはまるものがありませんでした。詳しい研究の結果新種であることがわかり発表しましたが、この後インドシナ半島各地から10種ほどの新種を発見し、記載してきました。いまのところ、僕が調査に訪れた場所でミナミヤンマの新種が採集できなかったところはほとんどないので、現在50種近くになったこの仲間も、調査が行き届けば70—80種にはなるのではないかと考えています。

そして、研究が進むにつれて、今度ははたしてこのミナミヤンマの仲間全体がどんなグループで構成されていて、それぞれのグループがどういう関係にあるのかという、いわば進化の道筋に興味を持つようになりました。このためにはまず、ミナミヤンマの仲間では知られていないすべての種類に当たって詳しく形態を調べていこうと考えました。これらの種の中には、発表されて以来全く追加標本が採れていないものや、新種として発表したその元となった標本(タイプ標本といって重要なものです)の所在がわからなくなっているものもあって、1800年代の、現在のような写真や図がつかない簡単な記載しかない論文からは、情報不足で正体が不明のものもかなりあります。結局「本物」を実際に調べにいっていかないとだめです。そこで、日本にいてはどうにもならないこれらの問題を解決するために、今年の4月、僕はヨーロッパの博物館を調査のため訪れました。今回まわったのはライデン(オランダ)、



翅の模様が美しいキモンミナミヤンマ (スマトラ産)

ジェノバ(イタリア)、ロンドン(イギリス)の各博物館です。

これらの博物館はそれぞれ100年近くの歴史を持ち、植民地時代のものを主とした膨大かつ学術的に貴重な資料の宝の山のようなところですが、もちろん一般向けの展示もくそまじめな日本の博物館では考えられないようなものもあって、大変興味深いものですが、今回僕が「用があった」のはいわば裏方になる標本収蔵庫のほうで、担当学芸員の方にお世話になりながらミナミヤンマを中心としたタイプ標本の調査をしてきました。これらの博物館のこともいずれ機会があればご紹介したいと思います。とにかくあまりに膨大な資料と学芸員の方々の親切な対応には涙が出るほど？感激しました。そして、訪問の目的の正体不明の種の解明を含めかなりの収穫を得て帰国しました。その後、6月には南北ベトナムで調査を行い、今回も南北それぞれ1種ずつの新種のミナミヤンマを採集してすることができました。

なお、これは私ごとですが、今年は初めての子供が生まれたばかりで、これらの調査は必要なこととはいえっても妻子にかなりの負担をかけてしまいました。理解のある奥さんでよかったとつくづく感謝しています。ちなみに彼女も「虫屋」です。

話がそれましたが、このように、一見調査・研究の進んでいるように見えるトンボですが、わからないこと・新発見は毎年のように報告されています。ともかく、この数年はさらに積極的にフィールドや海外博物館での調査を進めてミナミヤンマの仲間のまとめをしていくつもりです。家庭崩壊しないといいな！